

〔平成 29 年度 博士学位論文要旨〕

「世代間倫理」から「継世代倫理」へ  
—比較文明学・人間学・モラロジーの視点から—

言語教育研究科 比較文明文化専攻 博士後期課程 竹中 信介

(論文要旨)

現在、地球と人類の未来を脅かす「地球環境問題(global environmental problem)」が我々人類全体の共通課題として浮上している。1972 年にローマクラブが発表した『成長の限界』という悲観的な将来像が描かれた報告書は、我々人類を震撼させた。その報告によれば、人類文明は 2030 年頃までにピークを迎え、その後、急速に没落へ向かうとされる。そのような衝撃的な報告がなされて以降、持続可能な社会や縮小社会、脱成長社会等へのパラダイムシフトが必要である、という主張が立て続けになされてきた。もしそのような主張が正鵠を射たものであり、我々が現状維持以外に何も手を打たないならば、現代文明において「希望」や「永続」という言葉で形容されるような未来のヴィジョンを描くことは非常に困難なのではないだろうか。このような先行き不透明な「有限性」の時代にこそ、まさに思想的パラダイムを転換するような「未来への希望」を説くヴィジョンが必要であり、筆者はその糸口を「倫理(ethics)」の再構築の中に求めたいと考えるのである。しかも、それは、我々人類が歩んできた「過去」の歴史が、「現在」の我々に生きる力を与え、「未来」への希望をつなぐことが可能な倫理でなくてはならない。そのような倫理を、本論では「<sup>けいせだいりんり</sup>継世代倫理(the transgenerational ethics)」と名づけ、その構築を目指す。そして、今後我々が「希望」を持って生きていくには、そのような倫理を実現する場である「<sup>けいせだいていどう</sup>継世代的道徳共同体(the transgenerational moral community)」の創設が必要になると考える。

現代文明の倫理的状況を俯瞰的に見れば、様々な面において、物事のあるべき姿や、人間の理想的な生き方が問われていることが分かる。例えば、企業倫理や教育倫理、生命倫理、情報倫理等がその良い例であろう。いま挙げた分野では、基本的に、その倫理の在り方を、共時的で同時代的な文脈において議論する傾向にある。しかし、通時的な視点から希望のある未来像を描こうとする本論においては、それらの「倫理」は主たる準拠枠とはなり得ないのである。

他方、地球と人類の未来について通時的な視点から議論が深められてきた分野として「環境倫理学(environmental ethics)」を挙げることができる。その中でも注目されるのが、環境倫理学を構成する主軸の 1 つ、「世代間倫理(intergenerational ethics)」である。

しかしながら、これまで議論されてきた「世代間倫理」は、往々にして「未来志向」的であり、「過去」という視点が欠落する傾向にある。それを受けて、本論では、この「世代間倫理」の時間軸に「過去」、さらには倫理の対象に「自然」という要素も加えた「継世代倫理」という概念を新たに構築する必要性を説きたい。

そもそも、従来の「世代間倫理」とは、「現在世代(present generation)」から「未来世代(future generation)」に対する責任や義務、思いやりや愛を取り上げるものであるが、本論では「過去」や「過去世代(past generation)」、「自然(nature)」、そして「超越性」をも視野に入れて、「世代間倫理」をさらに進化させ、新たに「継世代倫理」の構築を目指そうとするのである。もちろん、本論では、従来の「世代間倫理」の研究がまったく無意味であるというのではなく、それをより一層補強し充実させる必要があると主張したいのである。

第1章では、「世代間倫理」をめぐる思想的系譜を歴史的に管見するにあたり、まず、科学万能主義が「地球環境問題」を生み出すことになった元凶と認め、その思想的源泉を近代の「科学革命(Scientific Revolution)」期に求めた。そのような歴史的経緯を踏まえつつ、環境倫理学において問題にされている「世代間倫理」研究を重点的に参照しながら「世代間倫理」の理論的枠組みと「世代間倫理」の応用的研究の現状と可能性についても考察した。現状については、既成の「世代間倫理」研究に加えて、隣接する「世代間正義」の問題をも適宜取り上げた。可能性については、これまで「世代間倫理」研究の文脈では取り上げられてこなかった問題、例えば生命や徳の次世代への継承、家や企業の永続、国家の盛衰、歴史認識の問題をも「世代間倫理」研究の枠組み内で検討した。その一方で「世代間倫理」に否定的な意見もあるので、そのような倫理は成立しないのではないか、という疑問に答える形で「世代間倫理」の成立条件を考察した。

次に第2章では、従来の「世代間倫理」研究に欠如していたマクロ的視点に着目し、特に「比較文明学(studies of comparative civilizations)」の立場から「世代間倫理」へのアプローチを試みた。同章では、人類史(human history)、特に文明発展の歴史を概観するうえで、過去において人類(人間)が、自然とどのように関わってきたのかという視点に立ち、「継世代倫理」の必要性を明示した。まず、「世代間倫理」の比較文明学的意義について言及するとともに、第2章での考察の準拠枠(referential framework)について述べた。比較文明学の研究については、これまで例えば、シュペングラー(Oswald Arnold Gottfried Spengler, 1880-1936)やトインビー(Arnold Joseph Toynbee, 1889-1975)ら、多数の先駆者が存在するが、彼らの研究手法は、主として「西洋」に軸足を置いているため、グローバルな時代における普遍的なパラダイムとしてはおのずから限界を露呈している。一方、伊東俊太郎による人類史全体を公平な視野の内に収めた比較文明学の方法は、西洋から東洋に至るまで、あらゆる文明を考察するうえで応用が可能であり、その学問的通用性が極めて高いと考えられるため、第2章では伊東の分析方法を採用することにした。次に、人類史における5大革命(「人類革命」、「農業革命」、

「都市革命」、「精神革命」、「科学革命」)論をもとに、自然と人間の関係性という視点から「世代間倫理」に焦点をあてることにした。特に自然と人間が、過去から現在に至るまで通時的にどのように関わってきたのかを検討することが、「世代間倫理」が「継世代倫理」へと展開するうえでの重要なプロセスになると考えたからである。続いて、「地球環境問題」の解決と最も関係が深い、伊東の「環境革命」論に注目し、その中で「世代間倫理」の占める位置や、それを進化させる形で「継世代倫理」への展望を考察した。最後に、「環境革命」の内実の1つである「人間革命」の重要性に着目し、それを新たにミクロ的視点へと落としこむことの必要性を提起した。

第3章では、人間学の立場から「世代間倫理」、さらには「継世代倫理」をミクロ的視点から考察する必要性を主張した。また同章では、人間存在を包括的・統合的に捉えることが可能な人間学のアプローチに注目し、考察の準拠枠としては下程勇吉(1904-1998)の人間学・人間存在論に焦点を当てることにした。「神(超越的存在)」という宗教的視点をも積極的に取り上げる下程の人間学は、科学的、生物学的な人間存在論では捉えきれない倫理的、宗教的な人間存在論を追求する本論でも、すこぶる大きな役割を演じることになると考えたのであった。もちろん、下程という学者が活躍した時代が、ちょうど「近代」から「現代」への過渡期であったことも重要であろう。時代の子である下程の人間学には、個人主義に代表されるような近代的価値観に拘束される部分もあるが、だからこそ逆にその点に着眼すれば、そこに欠けている視点、すなわち現代的に必要な価値観がより浮き彫りになるわけである。本論では、「現実性の原理」、「実存性の原理」、「超越性の原理」という3層を基本的な構造とする下程の人間存在論に注目しつつ、通時的(diachronic)、継代的な(transgenerational)視点の希薄さをも同時に指摘するという形をとり、「近代」の価値観を尊重しながらも、その「超克」を考えようとしている。下程の時代にも、遺伝学や歴史学等、人間存在を通時的に見る視点は存在したはずだが、下程が言及する科学は、生理学や社会学といった、主として共時的に人間存在を研究対象とするものである。もちろん、下程の人間学でも、「個人」の心理的地平における「過去」、「現在」、「将来」の時間軸が重視されており、まったく通時的な視点がないわけではないが、「過去世代」や「未来世代」を問題意識の中核に据え、それらの世代の人類との関係性において人間存在がどのように成立しているのか、といった意味での通時的・歴史的な視点からの人間存在論は展開されていない。さらに、下程の人間学では、「自然」の問題が、ほとんど取り上げられていないので、その点を補うために、超越的存在と自然との関係性を有機的、接続的に捉えようとした廣池千九郎(1866-1938)とモラロジーの視点に注目する必要があることを述べた。

第4章では、まず、「世代間倫理」における「自然」の位置づけについて再確認した。これは、第1章で考察した「世代間倫理」の成立条件にも通ずるが、本論では、人間存在を支える基盤として過去から永続してきた通時的存在としての自然を重視する。伊東が主張するように、日本では、古来、自然と人間の間には「根源的紐帯」観があったこと

は、過去から現代にまで受け継がれている日本の文化的伝統を概観すれば明らかである。そのような東洋(日本)的自然観に立脚すれば、自然と人間を分離的に捉えることはできないであろう。さらに、「世代間倫理」の視点から、「未来世代」への倫理的配慮を考える際にも、未来の地球あるいは自然の持続可能性という問題を抜きにして、人類(人間)のみの生存を考えることはできないのであり、「世代間倫理」の必然的成立条件として、「自然」という要素は不可欠なのである。そして、モラロジーの視点から、どのように「世代間倫理」と「継世代倫理」を捉えることができるのかを考察したわけだが、ここでも問題となるのは自然と人間と超越的存在の関係性であるので、廣池千九郎の自然観を踏まえたうえで、廣池の主著『道徳科学の論文』に見る超越的存在と自然と人間の関係性に注目した。さらに、今後の「地球環境問題」解決の実質化という課題を念頭におき、本論で考察した「世代間倫理」と「継世代倫理」を、さらに具体的な「行為」の次元に落とし込むべく、「倫理」から「道徳」への転換の必要性に言及した。

終章では、現在の学問的状況を踏まえながら現代文明の行方について考察した後、「継世代倫理」を実現する場である「継世代的道徳共同体」の具体的なイメージを描き、その創設意義を確認した。